



特集

豪雨災害から一年

災害から 身を守るために

近年、短時間での局地的な大雨により各地で大きな被害が多発しています。

昨年7月の豪雨では、鹿児島県で初めて大雨特別警報が発令され、長島町にも甚大な被害をもたらしました。

災害はいつどこで起こるのか誰にも分かりませんが、備えることはできます。「経験したことのない大雨」を経験したからこそ、どのように備えるのか。一人ひとりの備えが自分の身を守ることにつながります。

今号では、さまざまな立場で昨年の豪雨災害を経験されたかたがたから話を伺いました。



あんなに降るとは
思わなかった

永岡和志さん(浜漣)

昨年の7月豪雨で町内唯一の全壊被害を受けた永岡さん。当時の様子を聞いてみると、「雨が降るとは分かっていたが、あんなに降るとは思わなかった」と話しました。

7月4日の朝4時頃、窓ガラスが割れた音で目が覚めました。停電して辺りは見えない中、泥の臭いで土砂崩れだと分かり、すぐ近くの親戚宅に避難しました。「子どもの命が最優先だったため、すぐ避難した」と当時の様子を話す永岡さん。一緒に住んでいる母は寝室から隣の部屋までベッドごと泥に流されてしまった。家族の誰にも被害がなかったのが不幸中の幸いでした。

当時と似たような雨の音などがすると、今でも思い出します。「今まで大丈夫だったという気持ちはいもう通用しない。家の周りの地形を確認して、最悪の事態を想定しておくべき」と豪雨の被害を誰よりも受けたからこそその備えを教えてくださいました。



安全第一を心掛けて

木場盛二さん(長島建友会会長)

7月豪雨では各地に甚大な被害をもたらしました。被災を受けた箇所の復旧作業に取り組んでくれたのが長島建友会のかたがたでした。

町と同会は平成20年に「災害等発生時応援協定」を結び、以来、災害時の復旧作業に尽力しています。「事業所によって担当場所が決まっています。災害時に迅速に対応できるようにしている」と話す木場盛二会長。

強い雨が降ると予想されるときは、何かあれば対応できるように各事業所は待機して、災害発生時は、住民がよく使用する主要道に優先的に復旧し、生活に支障が出ないよう努めています。同会では、災害復旧だけでなく海水浴場の伐採やロードミラー清掃、安全パトロールなどさまざまな活動をしています。普段当たり前のように通っている道路や、使用している公共施設などは同会員の努力によって保たれています。

「災害箇所を確認するのも、作業するの人も。安全第一を心掛けて、今後も復旧作業に取り組んでいきたい」と木場会長は語りました。



自宅の裏に
流れ込んだ土砂

土砂崩れて傾いた自宅



復旧に感謝

湯元刷さん(湯ノ口自治公民館長)

7月豪雨で被害が大きかった獅子島地区。4日朝の1時間あたりの最大雨量は90ミリを超えました。被害の大きかった湯ノ口自治公民館長の湯元刷さんは今までにない雨の音で夜中に目を覚まし

ました。地元消防団と連携し、もくもく館を緊急避難所として開設。住民へ避難を呼び掛けました。避難していない住民には個別に連絡を取り、家の中のできるだけ高い場所にいるよう呼び掛けました。

「住民に被害がなくて本当によかった」と話す湯元さん。1年が経ち、被害を受けた箇所は徐々に復興が進んでいます。「いろんなかたがたのおかげで普段の生活を取り戻せた。とくに消防団には感謝している」と感謝の気持ちを語りました。

一方で、今でも雨が降ると当時を思い出して怖くなるそうです。豪雨は土地や建物の被害だけでなく、人々の心にも被害を与えました。



雨で倒れた集落の電柱

道路を寸断した土砂



早めの避難を

内田秋宏さん(長島町消防団平尾分団長)

「前日から雨が降るのは分かっていたが、まさかあんなに降るとは思わなかった」と当時を振り返る平尾分団長の内田秋宏さん。平尾地区は各所で被害が起き、その対応に消防団は追われました。夜中3時頃に出動要請の電話があり、団員を集めて現地向かいました。

明るくなるにつれて対応依頼が増え、人員を割り振って常連連絡を取り合い作業を行いました。「住民の消防団への期待は高い中、できることは限られている」と話す内田分団長。非常時のために用意していた土のうは、ほ

んど使用してしまいました。

消防団として地元のかたがたのために尽力する一方、分団長として団員の安全第一を考え、二次災害が起きないように時には出動を止めなければなりません。「被害がひどくなつてからは対応が難しくなる。早めの避難など、まずは一人ひとりの備えや意識を持つてほしい」と語りました。

備えあれば憂いなし

さまざまな立場から7月豪雨を経験された4人のかたがた。共通していたのは「あんなに降るとは思わなかった」という言葉です。近年の災害は予想をはるかに超える被害をもたらしています。しかし、備えていれば被害は最小限に留めることができます。災害に遭ってしまったとき後悔しないよう、できるところから始めましょう。



住民宅へ積んだ
土のう(中瀬)



消防団で土砂撤去の様子(母良木)



復旧後・災害時(御所ノ浦)